

### セクシャルスクール3 ―サンプル―

#### 1

文化祭から五日。寮の保健室。

里実 は、腹を守るように小さく丸まっている。

眠って一時間経つが、今のところうなされてもない。今日は少し、食事もとれていた。

けれど時折揺れる腫やノックの音にびくりとする様子を見ていれば、心が回復していないことは明らかだった。

ひどい痛みだっただろう。それにどんなに怖かったことか。

自分があの時里実のもとを離れてしまったから――  
須坂は強く唇を噛んだ。

それなのに里実 は、自身の休学によって須坂 が休みになるなら趣味のサッカーに行けなどと言う。自分より他人。その健気さがたまらなかった。

それでいて里実 はどこか雰囲気 がぼわんとしている。そのちよつと抜けたような感じや、純粹 そうな性格が外見にしっかりと表れてしまっているせいもあって、言葉を選ばずに言えば狙われやすいタイプだった。

絶対に守る。そう決めていた。教師としてだけでなく――。

須坂 自身、会ってすぐの時から里実の魅力に惹き込まれていた。

この学校への入学経路は主に三種類。

本人の入学希望、系列風俗店からの紹介、そして最後に一般からの相談。

相談というのは、会社の社長である宗形が若者の貧困や虐待に関心を持つていることから始まった制度で、行政の手が伸びにくいと思われる子を見つけた人から本部に連絡をしてもらうことで、本人の希望と条件が合えば就職を引き受けるというものだ。

そして里実是一般からの相談がきっかけだった。

連絡があつたのは、まだ寒い春の始まり。本部に届いた、系列風俗店の客からのメール。

――家族に虐待されている、かわいい男の子がいます。

挨拶もなく突然切り出されていたそれは、須坂も後になつて全文を読んだ。

のちに里実の入学を決めた担当者は、須坂にすべてを話してくれた。

本部の担当者は、メールの送信者とカラオケ店で顔を合わせたという。

約束の十分前にやって来た男はペラペラのダウンジャケットに身を包み、色あせたスラックスをはいていた。

「私はもう実家を出てるんですけどね」

あまり人と話すことに慣れていないのか、その男は

担当者をちらちらと見ると照れたように頭をかきながら話を始めた。

「高齡の両親がいますから、たまに生存確認がてら電話をするんですよ。その時にね、両親以外の声が聞こえた気がして。訊いてみると、若い男の子が家にいるなんて言うんですよ。最近ほら、特殊詐欺とかトクリュウとか怖いことも多いじゃないですか」

担当者は男が話すペースを乱さぬよう、相槌を打つだけで先を促した。

「それで、どんな子なんだって訊いたんです。そうしたら、近所の子だって。虐待を受けてガリガリに痩せていて、近所でも有名だって。でもその親にちゃんと世話をしてやれと言ってものれんに腕押し状態らしくて。それで近所の年寄り同士で持ち回りで頼み事をしてやる体で家に呼んで、飯を食わせたりお小遣いをやりとりしてるって」

虐待を受けている子はごまんといる。しかし最近ではそうやって周りが手を差し伸べるといふのは珍しい事例だった。

虐待をしている家は一癖ある親が多い。だから児童相談所に通報するのがせいぜいだ。それでさえ逆恨みされたくないと躊躇する人も少なくない。

「それで私も偶然を装って一度家に行ってその子を見てみたんです。たしかにいい子なんです。敬語も使えるし、謙虚だし。まあ家に居場所がなくて、引っ込み思案というかおとなしいというか、自分が邪魔な存在っ

て、自覚って言ったらかわいいですけど、そう思ってる  
みたいな。正直顔もかわいい系で、守ってあげたくなる  
ような感じっていうか。けどうちの親も近所の人たち  
もみんな年金生活ですから、そんなに余裕はないんで  
す。私も恥ずかしながら氷河期世代で、どうしてやるこ  
ともできません」

そこまで聞いてようやく担当者は口を開いた。

「その子は、おいくつですか」

風俗で働くという選択肢を与える前に、しかるべき  
施設に相談するという道もある。むしろその方がいい  
だろう。

男は力なく首を振った。

「十七歳。もうすぐ十八になるそうです」

「……そうですか」

それでは行政に相談したところで、自分で生活でき  
ると判断される可能性が高い。それに聞いている限り  
だと生命に危険のある様子でもない。もしそうならこ  
の男だって風俗店に連絡する前に警察に通報している  
だろう。

「高校には行っていないようなんです。今時中卒では仕  
事なんてほとんどないでしょうし……何より今の家か  
ら仕事に行ったら、どうせ金なんてすべて親に取ら  
れちゃうと思うんですよ」

まだどのような虐待を受けているのか、家族構成な  
どもわからないのでなんとも言い難い。しかし見ず知  
らずの男の子のために懸命に話す男のことを思うと、

担当者は領かずにはいらなかった。

「だからそれなら……風俗だったら寮があるっていうじゃないですか。学歴とかも関係ないし……調べたら履歴書だっていらないうて。保証人とか」

「おっしゃるとおりです。ですがうちはゲイ向けですよ。その子はゲイなんでしょうか」

男は力なくうなだれた。

「わかりません。でも男で手っ取り早く大金を稼げるなんてゲイ向けの風俗しかないでしょう？ A V男優とかもあるかもしれないけど、その子はそういうタイプの子じゃないんです。もっと純粹そう、って言ったら語弊があるかもしれないですけど。それにその……私もゲイなのでこういう言葉しかわからないんですが、ネコっぽいつていうか……男にかわいがられて幸せになるのもありなんじゃないかなって思うタイプっていうか」

「……そうですか」

ゲイ向けの風俗店で働く男が必ずしもゲイとは限らない。ノンケでも金のためと割り切って働く者も多い。しかし割り切れるかどうかはその人の考え次第だ。

「一度でいいんです。遠目からだけでもいいから見てみてくれませんか」

しかしこの時点で、ゲイかどうかもわかっていない。本人の希望さえ知らない。むしろ本人は、この男が自分のことを風俗店の人間に相談していることなど想像だにしていないだろう。

それに何より年齢がネックだった。本人が希望したとしても十八歳になるまでは働くことができない。

「今からお時間ありませんか。今日、私の実家に来るはずなんです」

「……わかりました」

無駄足になるだろう。そんな気持ちだったが、担当者が領いたのは、その子のためではなく目の前にいるくたびれた男のためだった。金はない。どうにもしてやれない。でもどうにかしてやりたい。そんな気持ちがひしひしと伝わってきた。

助手席に男を乗せ、車で移動すること一時間。

山裾にある小さな住宅街。右へ左へと言われるがままハンドルを捌いていると、突然男が止めてくださーいと言った。

担当者は慌ててブレーキを踏んだ。道の左にはどこにでもある一軒家。

「ここですか」

「いえ、うちがあるのはもう少し先なんですけど」

男の視線は右側にある公園の中に向いていた。

ブランコに乗る一人の痩せた男の子。他には誰一人いない。ぽつんと一人、足を地面につけたままゆらゆらとブランコを前後に揺らしている。

「あの子ですか」

「そうです。今着ている服、たぶん私のです。私が実家に住んでいた頃に着ていた古いやつ」

では、きつと上着さえも持っていない子なのだろう。

「今日、あの子のご実家に行かれるはずだったので  
は？」

「たぶん、時間を潰してるんだと思います。長居しない  
ように。前にお袋が言っていました。遊びにおいで、ご飯  
を食べにおいでと言っても絶対に来ない。自分は迷惑  
な存在だと思っている。だから頼みごとをしてあげな  
いといけないって」

担当者はサイドウィンドウ越しにブランコを見た。

男も身を乗り出すようにして男の子を見つめている。

「かわいそうに……」男の震えたつぶやき声。「ああ  
やって一人ぼっちで……」

担当者自身もあの子を助けたいと思った。しかし、十  
八歳になるまではどうしてやることもできない。

「あの子はこの公園にいることが多いんでしょうか」

「私もこの街を出て長いですから……でもあの子の様  
子だとそんな感じがしますね」

「わかりました。もしあの子の家をご存知でしたら教  
えてください」

そうして担当者は男の子の実家の場所を把握し、会  
議にかけた上で本部のスカウト部門に引き継いだ。そ  
の後、今度はスカウトマンがさりげなく男の子――里  
実に接触し、風俗の仕事なら自分できちんと稼げるこ  
と、学歴は関係ないことなどを丁寧に説明した。しかし  
ながら里実には性的な知識がまったくないことがわかり、  
最低限の玩具の説明などをして嫌悪感がないことを確  
認した上で、十八になるのを待って学校への入学を進

めたのだった。

そうして、里実はこちらにやってきた。

静かに寝息を立てる里実を見下ろす。

生まれてからずっとつらい思いをしてきて、ようやくここで幸せになる道を見つけて、それなのにネコクラスの時は嫉妬から大怪我をさせられ、それでも頑張って進級したら今度は声を失った。

今回のことは生徒を除く学校関係者全員が把握し、憤り、里実に怪我をさせた客の徹底的な排除を望んでいる。

須坂も当然同じ気持ちだった。けれど危害を加えた客に対するのと同じくらい、自分に対しても怒りを覚えていた。

（里実……）

小さな頭を撫でる。

今はさらりとした髪も、スカウトマンが会った時はべったりと汚れていたらしい。風呂に入っていないことは明らかで、そのことを里実自身も自覚しており、スカウトマンから距離を置こうとしていたらしい。

須坂は、その時の里実を抱きしめたかった。抱きしめて、もう大丈夫だと言ってやりたかった。

でも、自分は守れなかった。

「里実……」

小さな耳に唇を触れさせた時、静かにドアの開く音がした。



「須坂先生。応接室に来客ですよ」

同僚の岩村だった。小さな声で言って、ベッドに近づき里実を見下ろす。

須坂は静かに返した。

「来客？ 俺にか」

「ええ。里実くんは俺が見てるから、行ってきた」  
離れたくない。

里実を見つめたまましていると、背中を叩かれた。

「待たせない方がいいよ」

待たせない方がいい。いったい相手は誰だろうか。

須坂は名残惜しい気持ちで里実の頭を撫でると、振り切るように足早に保健室を出た。

須坂が応接室に入ると、つい先ほど思い出していた男がいた。

ぴしっとした三つ揃えのスーツ。神経質そうな顔が須坂に向かって頭を下げる。

「ご無沙汰しています」

「……どうも」

里実を担当した本部の男、小島だった。

小島がソファに座るのを見て、須坂もその正面に腰を下ろす。

「里実くんが怖い思いをして声を失ったと」

「……はい」

「先日会った時は元気になっているようで安心していたのですが」

先日――貞操帯の上からペニスをいじらせるという宿題を出した時に、里実の相手をしたのがこの男だった。なぜ寮にいたのか不思議だったが、里実の様子を見に来ていたということか。

本部からわざわざ。

この男がそんなことをするなんて想像がつかなかった。もともと本部の人間は多忙で、里実をスカウトした時のように、必要があれば全国どこにでも足を運ぶのだ。

「それがいったい、どうしてこのようなことに？」

「それは……」

自分が里実から離れたから。けれどそれは須坂の感情的な言葉でしかない。生徒が里実一人だからこそ須坂と一緒に回っていただけで、通常の四人クラスであれば生徒たちは自分で自由に移動し文化祭を満喫するはずだったのだ。現に他のクラスの生徒はそうしていた。

かといってそれを言えばまるで自分は悪くないと発言しているようで、須坂自身が受け入れられなかった。

「それは？」

須坂は、淡々とあの日の状況について話した。

小島が息を吐いた。

「チェック体制の不備。本部にも責任があります」

そうですか、とも、そうですね、とも言えず曖昧に頷く。

「会員制とされていますが、客が増えすぎたのかもしれない。

れませんね。上に報告を上げ、里実くんへの補償を検討します」

「理事長から見舞金の話はあったようです。里実はまだ何も答えていないはずですが」

小島が須坂に冷たい一瞥をくれた。

「当然、それとは別に」

小島が腰を上げた。それを見て須坂も立ち上がる。

見送りのため廊下に出る。昇降口までの道中、小島は何も話さなかった。しかし靴に履き替えたところで須坂を振り返った。

「……もし里実くんが今後ここにいることを望まなかったら」

須坂は真剣な小島の瞳を見つめ返した。

「もしくは、あと数日経っても声が戻らなかったり、状況が改善しなかったら。そのときは私が個人として彼を引き取ろうと思います」

「え——」

「あの子は、この学校に入れるべきではなかったのかもしれません」

（里実……）

須坂が保健室に戻っても、里実はまだ眠っていた。

隣には養護教諭が寝転び、里実の頭を優しく撫でている。もう岩村の姿はない。養護教諭とバトンタッチしたらしい。

「呼び出し、なんだったの？」

ささやくような質問に、小声で返す。

「小島さんだ。小島さんが来てた」

「小島って？」

「本部の、里実の担当者」

答えると、養護教諭は静かにベッドを出た。

ドアを開けたまま、続きの部屋に移動する。

「担当者がなんだって？　っていうか、もう入学してるんだから担当とかは終わってるでしょ」

「目的は聞き取りだった。文化祭の時の」

養護教諭が訝しげに眉を顰める。

「報告は上がってるはずだけど」

「直接聞きたかったんだろう」

養護教諭がはあ……とため息をつく。

「それだけ本部も大きな問題だと認識してるってことか」

それだけではない。おそらく須坂への牽制だった。あの様子だと、ネコクラス時代のトラブルも耳に入っていることだろう。

「須坂先生？」

「――ああ、いや、なんでもない」

「須坂先生もそろそろ休んだ方がいい。里実くんならおれが見てるから」

「離れるわけないだろ」

話は終わった。養護教諭の脇をすり抜け、里実のベッドに入る。

「里実……」

腕枕をすべく、腕を伸ばす。これまでだったら腕が触れると眠っていても頭を上げたのに、今はピクリとも動かなかった。

腹筋に力を入れると痛むからだろうか。

それとも守れなかった須坂を見限ったのか。

（すまなかった…）

守ると約束したのに。大切に思っているのに。

2

「里実、そろそろミルクの時間だぞ」

喉は渴いていなかった。食欲もほとんどない。

けれど飲まないと、須坂も養護教諭も心配する。

抱き起こされ、須坂の足の上で哺乳瓶の乳首を咥える。

「かわいい。里実は顔も体も幼いからよく似合うよ」

恐怖の文化祭から十日。

須坂は一日中、ずっと一緒にいてくれた。途中席を外すことがあってもすぐに戻ってきてくれたし、学校に行かなければいけないときは養護教諭を呼んで、里実が一人にならないようにしてくれた。

腹の痛みは続いていたし、声も出ない。

けれど、もう大丈夫だと伝えたかった。

「よし、全部飲めたな。いいこだ」

乳首を口から引き抜くと、須坂は里実の口元を柔らかなガーゼで拭った。

「かわいすぎて、齒があるのが不思議なくらいだな」

そう言って笑いながら里実をベッドに下ろす。

ノックの音がして、養護教諭が入ってきた。

「ただいま。里実くん、気分はどう？」

「今ミルクを飲んだところだ」

「全部飲めた？」

「ああ」

須坂が空いたばかりの哺乳瓶を振って見せる。

「そう……うんちは？ 出た？」

「いや、出てない」

「腹筋に力を入れるのが怖いのかな……」

開かれたオムツ。その中を、真剣な顔で須坂と養護教諭が覗き込む。

「マグネシウムも効いてないし、こういう時でなければ浣腸するんだけど」

「一気に強い便意が来たら余計に怖いだろう」

須坂はこれまでも、里実の腹を優しく撫でてくれることがあった。けれど便通マッサージほど押されないのは、里実の腹痛が続いていたからだ。

「だから使ってないでしょ。昼もミルクはしっかり飲めてるよね」

「ああ」

里実は文化祭の後、一度も排便できていなかった。

別に、我慢しているつもりはなかった。オムツに排便すると思うと恥ずかしい上に抵抗ももちろんあったけれど、そもそも便意を一度も感ずることがなかったの

だ。

「腸に問題はないんだよな」

「ない」

「じゃあやっぱり怖いからか……」

「けどこのままじゃ苦しいだろうし……」

二人はずっと、体と同じくらい里実の心も守ろうと  
してくれていた。

養護教諭の視線が里実のぽっこり膨らんだ腹に向い  
た。

「里実くん」

声は、まだ出ない。視線を向ける。

「里実、少し指を入れるぞ」

相手は須坂。だからその行為自体に恐怖は感じない  
けれど、いざ便意が来て痛みが走ったらどうしようと  
いう不安はあった。

須坂が里実の隣に寝転び、肘をついて上体を浮かせ  
た。見上げると、額に軽いキス。

「怖かったら俺の腕を叩いてな。肩とかでもいいぞ」

里実が頷くと、須坂は足側にいる養護教諭に向かっ  
て手を伸ばした。まるで打ち合わせていたかのように、  
養護教諭が指サックをつけさせてローションを垂らす。

「里実……」

今度は唇へのキスだった。目を閉じて呼吸を止めな  
いことを意識する。

養護教諭が里実の足を開かせた。

直後、アナルに須坂の指が触れた。ローションを塗り

こまれ、次第にそこが柔らかくなっていくのがわかる。

「んう、ん……」

声は出ないが、小さく喉が鳴った。

「ゆっくり入れるぞ」

そこに何かを入れるのは久しぶりだった。

「きついな……痛いかな」

首を振る。

「まだ第一関節だ。もう少し入れるぞ」

須坂はもう里実にキスをしようとはしなかった。少し高いところから里実の表情を確認しながら指を進める。

「っ」

指が体内のモノに触れた。

「お、これだな」

「あった？」

体内で須坂の指が動く。

「ああ。硬くはない気がするんだけどな」

「掻き出せる？ まだ奥の方にある？」

須坂が指を曲げ伸ばしした。

「っ……！」

「怖いかな。やめようか」

首を数回横に振る。怖くはない。けれど指が入ってきた苦しさはあった。

でも楽になりたかった。須坂に楽にしてほしかった。指を入れられるより、パンパンに張った腹の方が苦しい。



「じゃあもう少しだけ頑張ろうな」

励ますような鼻の頭へのキス。

「里実くん、頑張って」

里実を挟んで須坂と反対側に寝転んだ養護教諭に手を握られた。右に須坂。左に養護教諭。優しい二人に見守られている。

「掻き出せそうだ」

「無理しないで。少し刺激するだけでも誘発剤になると思う」

たぶん二人にとっては医療的な処置でしかないのだろう。それでも排泄物を掻き出されるのは恥ずかしく、しかしながら恥ずかしいことを応援されるという背徳感は休学する前から知ってしまっていた。

「里実」

「里実くん」

二人の魅力的な男性に挟まれ、頭を撫でられたりキスをされたりしながらの摘便。

「っ――」

「ああ、出てきたな」

「里実くん、少しだけ頑張って出してみようか」

頷いて腹に力を入れる。頭を浮かせるようにすると須坂の指が抜け、それを追いかけるように排泄が始まった。

須坂も養護教諭も上体を起こし、里実の足の間を覗き込んだ。

（恥ずかしいっ……）

見た目だけでなくにおいもある。

けれど排泄が進むと、張っていた腹が楽になっていくのを感じた。ずっと感じていた痛みも引いていく。

「上手だ。もう少し」

「頑張って」

二人は里実の横に体を戻すと、まるで子どもに對するように里実をたくさん褒めた。

「偉いな」

「ちゃんと出せてるよ。すごいね」

「もう少し出るか？」

「疲れたら後で続きをしてもいいんだよ」

大切にしてもらっていると感じて心がぼかぼかする――そんなふうに見えるようになったのは、二人からの赤ん坊扱いのおかげだった。

二人は毎晩里実を挟んで寝て、胸をトントンしたり、絵本を読んだりして寝かしつけをしてくれた。

昼は喉が渇く前にミルクを飲ませ、お粥を食べさせ、歯を磨き、顔をガーゼで拭いて、抱っこをしてくれた。

オムツに排尿できた時は髪が爆発するほど頭を撫でて、たくさん褒めながら新しいオムツをあててくれた。おしゃぶりを啗えた時はじっと目を見つめ、優しい顔で「かわいい」と言ってくれた。

「お尻、きれいにしような」

須坂が新しいオムツを出し、汚れた股間を拭いてくれる。

「手を洗ってくる」

「里実くん、よく頑張ったね」

養護教諭のゆらゆら抱っこ。

この数日は「かわいいから」という理由でズボンをはかせてもらっていなかった。白いオムツがむき出しのまま、ふわふわした心地になる。

「かわいい。うんちよく頑張ったね」

褒められて嬉しい。

それに、長く続いていた腹痛もすっかり楽になった。

（たぶん、便秘のせいだったんだな……）

最初は結腸を越えて責められた痛みだった。しかしそれが治り始めるのと同じくして便秘の痛みが始まったのだろうと推測する。

「里実」

戻ってきた須坂が、養護教諭から里実を受け取った。

大好きな二人からの抱っこ。

二人に育て直されている。里実がもっていなかった、優しい両親。

「かわいいな」

「うん、本当に」

「俺のだからな」

「それは里実くんが決めることだと思うけど」

「里実。こいつに狙われるとちんちんに熱いチョコレート塗られるぞ」

「須坂先生に捕まると、泣いても叫んでも手足を拘束されて強引に連続絶頂させられるよ」

「それはもう経験済みだ」

「うわ、最低」

「なんでだよ」

「里実くんはまだ初心者なのに」

「授業だ」

「匙加減は担任に一任されてるはずだけど」

「問題なかった」

「里実くんは我慢強い子だから」

ぽんぽんと弾む応酬。

もう、二人の仲がいいからこそなのだとわかっていく。

やり取りする様子をじっと見上げていると、二人が一斉に里実を見た。言い合いが止まる。

「かわいい」

養護教諭が、須坂の腕に収まる里実の頭を撫でる。

幸せ。

けれどやっぱり、幸福を実感する度に怖くなった。

この時間がずっと続けばいいのに――そう思ってしまう自分の身勝手さが嫌だった。けれどもちろん、いつかこの時間に終わりが来ることは知っている。そしてそれがそう遠くないことも。遠くしてはいけないことも。

（早く学校に戻らなきゃ……）

この生活に慣れてしまったら、きっと一人に戻れなくなってしまう。就職だっただけでなくなってしまうかもしれない。

「……里実？」

無意識に、須坂のシャツを握りしめてしまっていた。

「どうした」

「里実くん？」

けれど、心配はかけたくない。気を遣わせたくない。  
首を横に振る。

「まったく」須坂が笑う。

「うちの子は甘えるのがなかなか下手だね」

「まあ、まだ始まったばかりだからな」

「来年くらいには甘えんぼになれてるといいけど」

養護教諭の言葉に耳を疑った。

（来年って言った……？）

思わず養護教諭を見る。

あと数日、長くても一週間くらいでこの時間は終わるものとばかり思っていた。

「ん？ どうした」

「なんか変なこと言ったかな？」

「里実」

手渡されたメモ帳とペン。赤ん坊になっても大切なことはちゃんと話そうと言って、二人は里実から意思疎通を奪おうとはしなかった。

『らいねん』

途中までしか書かなくても、二人は理解したようだった。

「エイジプレイはこんな短期間では終わらないよ」

「最低でも三か月はやるな」

では三か月かそれ以上を、こんなふうに過ごせると

いうことだろうか。

「もし途中で里実が学校に戻ることになったとしても、帰って来てからは赤ん坊でいればいいし」

「って言っても、休学中の今も好きな時に漫画読んだり大人として過ごしていいんだからね？」

二人はいつも、「とにかくストレスを溜めずにやりたいたと思ったことを、その瞬間にやれ」と言った。

「そうだ、今日藤田先生がヤツヒロって作家の新作が出るって言ってたよ」

「ダウンロードするやつか？」

「そう。あんまり紙は刷らないんだって」

「もったいないな。いい漫画描くのにな」

「高いんだって。印刷費」

「そうなのか」

「そう言ってたよ。藤田先生が。まあ、妹さんの言らしいけど」

笑いながら、須坂がタブレットを開いた。少し前に校長先生が持ってきてくれたもの。

「ああ、あった。これだな。もう売ってるぞー買った」

「早いね」

「クレカも登録してあるから」須坂が里実を見た。「読んでみるか？」

ヤツヒロという作家の漫画は読みやすい。漢字も覚えられるし、休学中の今、勉強になるのは漫画くらいだった。

里実が頷くと、養護教諭がベッドのリクライニング

を起こした。

須坂たちはいつも、里実を間に挟んで座る。右に須坂、左に養護教諭が定位置だ。両側にいてももらえると、守られているみたいで安心できる。

「ほら」

タブレットは里実が持つ。

この機械の使い方も、まだよくわからない。けれど電源を入れた最初の画面の真ん中にある本の形のところを指で触れて、タイトルを選べば漫画が読めることは覚えられた。

「そう、それだ。未読マークがついてるだろう」

これが未読マークだ、と教えてもらいながら指先で触れる。

「新刊はエイジブレイか。いいタイミングだな」

「エロもあるんでしょ？」

「あるだろ、当然。エロ漫画だし」

一ページ目を開く。

赤ん坊になって甘えたい男の子が、マッチングアプリというもので、パパを見つけるところから話は始まっていた。トントントン拍子に二人は出会って意気投合し、パパの家に行く。

「ああ、ブレイが始まるな」

最初に、パパは男の子の服を脱がせた。横にはオムツの袋が置かれている。里実がされたのと同じように、ブレイはオムツから始まるらしい。

（あ……）

脱がされた男の子のペニスは勃起していた。けれど小さくて、皮も被っている。

パパにそこを見られた男の子は目を潤ませ、頬を上気させていた。

「短小包茎か。エイジプレイでは人気だよな」

「いかにも赤ん坊って感じだからね」

（うう…）

絵で描かれた未熟なペニスはまさに里実と同じだった。短くて、細くて、皮も被っている。

「里実もこんなサイズだよな」

「かわいいよね」

やっぱり言われた。

（たしかに小さいけど…）

かわいいと言われると嬉しくなってしまう。けれど嬉しくなってしまうことが恥ずかしい。

漫画の中で男の子の勃起に笑みを向けたパパは、それを指で押し下げるとそのままオムツを閉じてしまった。

（あ…）

かわいそう。きつと触ってほしかっただろうに。

それなのに、男の子の顔はさっきよりもさらに興奮していた。

（赤ん坊扱いだからだ…）

赤ん坊は勃起をしても、射精はしない。そういう扱いをされたことに、男の子は興奮している。

男の子は目で愛撫を求めながら、それでも哺乳瓶か



らミルクを飲んだ。膝はすり寄せている。そしてオムツの近くには吹き出しで「キュンキュン」の文字。

（なんかむずむずしてきちゃった……）

文化祭の後、勃起は一度もしていなかった。けれど漫画がちょうど里実と同じ設定のものだったからか、感情移入してしまっている。

それにたぶん、須坂たちにたくさん大切にしてもらったので、心が癒えてきているのだろう。

「里実？ どうした。腹が痛いかな？」

「わからない字があった？」

ページを送らずにいたからか、二人が里実の顔を覗き込んだ。

慌てて目を閉じたけれど、遅かった。

「里実」

「かわいい。男の子だもんね、えっちなの見たら反応しちゃうよね」

「この程度で興奮しちゃう辺り、里実はまだまだ赤ん坊だけだな」

二人の色っぽい声。

須坂の手がオムツの上から里実の股間に触れた。

「少し起ってる――か？」

「どれ？」養護教諭が代わる。「……起ってる気もするけど」

小さいからわからない、ということのようだった。

「見てみるか」

「そうだね。せっかくだし」

リクライニングが倒され、オムツを開かれる。

そこに里実の意思は必要がない。だって、赤ん坊だから。

「ああ、起ってる。半起ちだな」

「小さいのがぴょこんと浮いてるのってかわいいよね」

いじってもらえるかと思ったのに、二人は満足げに頷くと、漫画と同じように勃起を下に向けてオムツを直してしまった。

「さて、続き読むか」

リクライニングが再び起こされ、タブレットの画面をつけられる。

けれど、先を読みたいとは思えなかった。これ以上ページが進んだら今以上にむずむずしてしまう。

「里実？ ああ、今は赤ん坊だからか。自分じゃできないな」

貸してごらん、と言って養護教諭がタブレットを取り、須坂は里実をあぐらの上に座らせて抱き込んだ。

「ほら、抱っこだ」

里実の腹の前で、須坂がタブレットを持つ。

「そっちらからも見えるか？」

「見える」

「里実はずが難しければ、眺めてるだけでもいいぞ」

膝をすり寄せてむずむずをなんとかごまかしながら、新たに表示されたページを見る。

パパによるお世話が続いていた。離乳食を食べ、お風呂。そこでもまた、男の子のペニスは勃起していた。そ

してやっぱり「キュンキュン」の吹き出しがあった。

しかしパパは泡のついた指先一本で焦らすようにペニスを撫で、皮もむかずに泡を流して風呂を終えてしまった。

「里実、読んでるか？」

頬が赤く染まっているのを自覚しながら頷く。

「なんで亀頭を洗わなかったか、わかるか」

わからなかった。だって洗わないと汚い。痒くなってしまう。須坂も養護教諭も、里実のそこは丁寧にむいて洗ってくれている。

「赤ん坊だからだよ。あのね、新生児はみんな真性包茎なの。むきたくてもむけないんだよ」

でも、この子は本当の新生児ではない。それとも体は大人だけれど、真性包茎のままなのだろうか。

「里実もこれからは同じようにしてみようか」

驚き、須坂を振り返る。

思った以上に顔が近くて驚いたけれど、須坂は軽く笑って里実の額にちゅっと吸い付いた。

「ちんちんが痒くなる前に綿棒を入れて洗ってやるから大丈夫だ」

「今より敏感なおちんちんになるね」

養護教諭まで楽しそうに言う。

（もっとむずむずしちゃうっ……）

苦しくて、腹を抱く須坂の腕にすがりついて首を振る。

須坂が笑う。

「限界か？」

三回絶え間なく頷く。

「かわいいね。けど里実くんは赤ん坊だからお射精はできないんだよ」

（そんな……）

「おい、あんまりいじめるなよ」

「おれより須坂先生の方が嗜虐心が強いくせに」

（しぎゃくしん）

養護教諭を見上げると、笑まれた。

「Sってこと。被虐はMね」

（え……？）

熱いチヨコレートをペニスに塗って遊ぶ養護教諭よりも、須坂の方がSなのか。

振り返るが、須坂は何も言わなかった。否定しなかった。

（ほんとに……？）

想像がつかなかった。だって須坂が、養護教諭を「あいつはえぐいぞ」と言っていたのだ。

「里実、ほら、ちんちんいじろうな」

強引に話を切り上げた須坂がタブレットをシートに置き、オムツを開いた。

（あっ……）

「さっきより起ってる。でも怖かったらそうアピールしろよ」

背後からペニスを握られ、そつとしごかれる。

（あっ、あ、あっ）

性的な行為への恐怖は感じなかった。  
ただただ気持ちよくて、与えられる刺激に夢中になる。

「っ、ッ……」

「怖くないか」

須坂が里実の耳に唇をこすり付ける。  
こくこくと頷くと亀頭を撫でられた。

「ーッ！」

「先っぽ、ぬるぬるだ」

「っ、っ……！」

「かわいい。タマも揉んであげるね」

養護教諭が、里実の陰囊をころころと転がす。

二人に敏感なところを刺激されて、さらに感度が上がっていく。

「くくっ！」

「カウパーが一気に増えたぞ。好きな時にイっていいからな」

須坂が空いた手で里実の右乳首をこね始めた。一気に刺激が増え、全身に力が入る。

「タマが上がってきた。そろそろだね」

「コンドームつけるか」

「そうだね、その方がいいかな。いったら寝ちゃうだろうし」

里実は久しぶりの性感で頭の中がぐちゃぐちゃになっ  
ているというのに、二人はまるでスケジュールでも  
相談するかのように淡々と話す。

「ごめんね、すぐ終わるから」

養護教諭がコンドームの封を切った。その間、須坂は亀頭を手のひらでぐりんぐりんと撫でまわす。

「……ッ！」

体がびくびくと跳ねる。気持ちいい。でも苦しい。けれどもっとしてほしい。

（あっ……）

須坂が手を離した。

代わりに養護教諭の手が亀頭を握る。

その手が下に向かって動いた瞬間、絶頂していた。

「っ……、っ！」

何が起きたのかわからなかった。

ドクンと全身が強く脈動し、精液が飛び出す。

目も開けていられず、まぶたを伏せて、まるで全力疾

走した後のような激しい呼吸を繰り返す。

「おい、なんでお前がイカせるんだよ」

「いや、イかせようと思ってたわけじゃないんだけ

ど……」

目を開けて、股間を見る。

コンドームが被せられ、白濁はその先端に溜まっていた。

「まったく。コンドームつけられるだけでイっちゃうとはな」

あきれたような言葉だったけれど、そういう須坂の声は優しかった。見えなくても、ほほ笑んでくれているのがわかる。

「敏感すぎたね」

「ああ」

ぼうっとしていると須坂にペニスを搾られ、コンドームを外された。それを受け取った養護教諭が口を縛って捨ててくれる。

「何が起きたかわからないって顔してるな」

回らない頭で頷く。

「精液溜まりを指の間で挟んで潰して、一気にコンドームを下ろしたんだよ」

手品だ。

里実なんて、両手を使ってもゴムが噛んでしまうことが多いのに。

「自分の中出しが好きでろくにコンドームなんて使わないくせにな」

「つけてあげるのは好きだよ。何かに突っ込むことなく、精液だって無駄にするだけの子がコンドームつけてる姿ってかわいいし」

「わからなくはないけどド変態だな」

「里実くんもコンドーム似合ってたよ」

褒められているのかわからず曖昧に頷くと、おしり拭きでペニスを拭かれた。

「眠かったら寝ていいよ」

射精後特有の急激な眠気は感じていた。

けれど、まだペニスは半起ちのままだった。オムツも閉じられていない。

須坂の手を握る。

「ん？」

セックスしてほしい――けれど声は出ないし、何より教師と生徒という間柄。かといって今騎乗位の練習をできるかといえば、そこまでの体力はなかった。

里実の顔を覗き込んだ養護教諭が笑った。

「セックスしたいんだね」

（あ……）

「須坂先生にちゅーしてみたら？ 言葉でねだらなくても、単純だから一発だと思うよ」

「一言余計だ」

「もう一回コンドームつけようね」

「っ……」

須坂を無視した養護教諭が里実のペニスをしごき、しっかりと硬くさせた。その後でコンドームをつけてくれる。

「ほら、準備できたよ。須坂先生に見せてごらん」

（あ……）

須坂は、当然会話をすべて聞いている。

けれど何も言われなかった。里実の行動を待っている。

おずおずと後ろを向き、足を開いて股間を見せる。

「俺とのセックスのために、他の男にコンドームをつけてもらったのか」

くく略くく



「里実。ほら、抱っこだ」

須坂は一日中愛しい相手を腕の中に閉じ込め、頭を撫で、漫画を読んだり勉強を教えたりと、里実のことをだけを考えて過ごしていた。藤田が持つて来た携帯ゲーム機で遊ぶこともあったし、そんな時里実が苦戦しながらも楽しんでいるように見えた。

このまま元気になっていくだろう。

そう思っていたのに、里実の表情は日に日に暗くなっていた。

「今日は勉強はやめて、昨日の続きをしようか。たしか水の精霊を見つけたところまで遊んだよな」

携帯ゲーム機を出し、電源を入れる。

ソフトは藤田が妹から聞いてきたおすすめのもの。男性同士の恋愛ものだけれど、攻略相手は精霊。農場経営シミュレーションゲームで、精霊と仲良くなり、セックスをし、子どもを増やして農場を緑豊かにしていく——というエロゲーだった。

最初に聞いた時は「おいおい……」と思ったものの、精霊たちは性に無知で、主人公が一から体のことを教えていく。気軽に遊べるゲームでありながら、里実の勉強にとっても最適なものだった。

里実が十字キーを操作しながら農場内を探索する。

須坂はその様子を里実の肩越しに覗き込んだ。

（あ、何かいるな）

画面の端でびよこびよこ動いているものがある。  
しかし里実が気付かない。

（まあいいか）

勉強にはなるが、そのためにやらせているわけではない。里実のペースで、里実がやりたいようにやったらいいのだ。

あつという間に昼になり、おかずが須坂と里実の昼食を運んできた。玄関で受け取る。

「里実くんの様子は？」

「今日は座ってゲームができてる」

「よかった。ご飯は甘口のカレーだよ。色が濃い方は須坂先生用の辛口。間違えないでよね」

「間違えるかよ」

笑って別れ、踵を返す。

開けっ放しにしていた寝室のドアの向こうに、ぼうつとする里実の姿が見えた。

ゲーム機を持つ手はだらりとベッドに落ち、くりつとした大きな目はどこを見るでもなく空を向いていた。

「……里実」

呼びかけてから部屋に入る。

里実がハツとした様子で須坂を見ると、気まずそうに俯いた。

須坂は明るい声を出し、気にしていないふうを装った。

「今日はカレーだぞ」

匂いで気付いていただろう。

しかし里実が驚いたように目を見開いた。

(……せっかく声が戻ったのにな)

それなのに、あまり話さなくなった。以前の半分も声を発さない。しかし心に傷を負っているのだ。焦ってはいけないと他の教師たちとも話し合っていた。

「里実は甘口だって。あと卵サラダ」

トレイをベッドテーブルに置く。

しかし里実に食欲がないことは明らかだった。

「……飴でも食うか」

一度背を向け、戸棚から校長たちが置いていったお菓子を出す。

「焼き菓子もあるぞ」

振り返ると、里実がうなだれているように見えた。

「里実」

大切にしたい。守ってやりたい。癒やしてやりたい。

ここが安心できる場所なのだと教えてやりたいし、甘やかしてやりたい。

「ほら、あーん」

里実の好きなぶどう味の飴。フィルムをむいて口に入れてやる。

「……ありがと、ございます……」

聞き逃してしまいそうなほどの小さな声。

「昼飯はやめて、ミルクだけにしようか」

ミルクにもカロリーと多少の栄養は含まれている。

しかし里実は首を振り、スプーンに手を伸ばした。手も合わせずに食べようとするのは初めてだった。明らか

かに様子がおかしい。

「おい、里実――」

須坂が止める前に、里実はカレーを口に入れた。咀嚼した瞬間、ガリツと大きな音。そして里実の驚愕の表情。

「大丈夫か。吐き出していいぞ」

おそらく、飴を口に入れていたことさえ忘れていたのだろう。背中を撫でながら口元に手を添えてやるが、吐き出そうとはしない。

それどころか、大丈夫というように首を振った。

(……里実)

どうして無理をするのだろう。気持ちをわかってやれないことがつらい。

「カレー二皿くらい俺が一人で食えるよ」

だから食わなくていい、と伝える。

しかし里実は、ぼろぼろと涙をこぼしながらカレーを食べた。

文化祭以降、数度目の呼び出し。

須坂は校長室で校長と相対していた。

「里実くんの様子はどうですか」

「……いえ」

声が出ない時は、まだ甘えてくれていたように思う。エイジプレイを嫌がっているふうもなかったし、ミルクもおいしそうに飲んでいた。

しかし声が出るようになってからはがらりと様子が変わってしまった。しかしその理由がわからなかった。

「養護の先生からも状況は聞いています。元気になるどころか、空気が暗くなっている」と

「……はい」

「彼も、どうしてなのかわからないと言っていました  
が」

「俺にもわかりません……」

須坂は、里実の変化をすべて話した。

「……そうですか。わかりました」

その翌日、須坂は再び校長室に呼び出された。

入室すると、校長の隣に小島の姿があった。

一気に警戒感が高まる。

「……どうも」

軽い挨拶をして、校長の正面に浅く座る。

「里実くんはしばらく、小島さんに預かってもらおう  
と思います」

思わず腰が浮いた。

「理事長はなんと？ 許可したんですか」

理事長は、里実は学校で過ごすべきだと言っていた  
のだ。

須坂は校長に尋ねたつもりだったが、答えたのは小  
島だった。

「ええ。状況を伝えたところ、こちらの判断に任せると」

「ですが里実是人見知りです。慣れない相手の家で落  
ち着けるとは思えません」

「ですが」小島が強く反論した。「親しい須坂先生と二

十四時間一緒に過ごしていても、よくなるどころか悪くなっているんじゃないか」

小島は、立場にかこつけて里実を引き取ろうとしている。須坂にはそうとしか思えなかった。

「ですが――」

「もう決まったことです」

しかし納得できるはずがなかった。

「今里実を別の環境に移して、それがプラスになるとは思えません」

「まずは三日。それで様子を見ます。もしパニックを起したり、様子がおかしくなるようなことがあれば夜中であってもこちらに戻します。定期的に写真や動画などで里実くんの状況はお知らせしますから」

相手は本部の人間。

校長を見ると、何か言いたそうに、けれど拳を握って唇を噛んでいた。

「校長はそれでいいんですか」

校長だって、里実をかわいがっていた。気に入っていたように見えた。

「私は――まずは、里実くんの意見を尊重したいです」

校長に許された精一杯の援護射撃だった。

きっと里実は、ここに残ることを希望する。

須坂たちは三人連れだって須坂の部屋に移動した。

入れ替わりで、部屋にいてくれていた岩村が退室する。

「里実くん。久しぶりだね。覚えてるかな」

小島は、須坂が聞いたこともないような優しい話し

方をした。里実を見る目も優しく穏やかで、まるで別人のように感じられる。

里実が不安げな目で小島を見上げた。

(覚えてなさそうだ)

この様子だと、きつと忘れている。どちらにしても初対面のようなものだ。行きたいなどとは言わないだろう。

安堵の息を吐きながら、二人のやり取りを見守る。もし里実が怯えるようだったら、すぐにでも抱きしめてやるつもりだった。

「前に、おちんちんをいじらせてもらったよ。貞操帯の上からだったけどね」

「あ……」

「思い出してくれたかな。あの時は里実くんがかわいくて、つい長時間いじってしまった。つらくなかったかな」

小島を思い出したらしい里実が、おずおずと頷いた。

「よかった。今日はちよつとお願いがあつてきたんだ」

小島を見る里実の黒目が不安げに揺れていた。

「私は仕事が忙しくてね。それで、里実くんに家を守ってほしいんだ」

(守る……?)

里実にそんなことができるわけがない。それでなくとも、須坂たちは今里実を赤ん坊として愛情を注いでいた。

「無理には言わないよ。でもまずは三日、うちに来て

くれないかな」

里実には行かないだろう。しかし行かないとは言いつ  
らいかもしれない。代わりに言ってやらなければ。

須坂が一步踏み出した時、里実がこくんと頷いた。

5

小島の住む家は背の高いマンションで、里実が乗り  
込んだエレベーターは外側の面がガラス張りになって  
いた。高所まで一気に運ばれる。

(わ、わっ……！)

速すぎて怖かった。足がすくみ、動けなくなる。

無意識に小島の服を握ると、小島はすぐに気付いて  
くれた。

「ああ、怖かったね。おいで」

〃  
〃  
略〃

「風呂、入ってこい。久々の移動で疲れたろ。今お湯溜  
めるから」

「あ、いえ」

「いいから」

「……じゃあ、シャワーだけお借りします」

本当は自分の部屋に戻ればいい。でも、そんなことを  
言える空気ではなかった。

一緒に入るって言ってくれなかったな、と思いなが



ら体を清め、髪も乾かしてリビングに戻る。

「先生、パジャマありがとうございます」

洗面所にあったのは、文化祭の後に須坂たちが用意してくれたものだった。それを洗って残しておいてくれていたのだ。

「ああ。先に寝ててくれ」

差し出された水のペットボトル。

それを受け取ると、部屋に戻ります、と里実が言う前に、須坂は洗面所に消えてしまった。

(……今までだったら)

一緒に風呂に入り、体を洗ってくれた。たくさん抱きしめて甘やかしてくれた。水分補給だって哺乳瓶でさせてくれた。

(……もう赤ちゃんごっこはおしまい)

おしまいでいいと、以前里実の方から言っていたのだ。須坂はそのとおりにしただけだ。

それなのに、心かもやもやした。

(……僕って勝手だ)

心のどこかで須坂はまた甘えさせてくれるものだと思っていた。

(やっぱり、先生も一人の方がよかったんだろうな……)

里実が小島のところへ行ったことで、須坂は一人の良さを思い出したのだろう。

(部屋に戻りますって言わなきゃ……)

それに学校だって復帰しないと、就職できなくなっ

てしまうかもしれない。そうになったら生きていけない。

(大丈夫……大丈夫……頑張る)

これまでずっと一人だったのだ。前の生活に戻るだけだ。

「――里実？」

「あっ」

呼ばれて顔を上げる。須坂が洗面所から出てきていた。髪も乾いている。

「なんだ、まだ寝てなかったのか」

それを聞いて、髪まで乾かしたのは里実が寝るまでの時間稼ぎだったのだろうと気が付いた。

「あ、その、僕――」

部屋に戻ります、と言う前に手首を掴まれた。

「ほら、寝るぞ」

腕を引かれ、寝室に入る。

(……今日、だけ……)

今日だけ、甘えさせてもらってもいいだろうか。だって五日ぶりに会えたのだ。

(明日からは、またちゃんと頑張るから……)

気持ちを切り替えて、ちゃんと一人に戻る。もう甘えない。

だから――。

里実がベッドに入ると、須坂も隣に寝転んだ。

けれど、腕は伸ばしてもらえなかった。

(腕枕……抱っこ……)

ツキン、と小さく胸が痛む。

けれど布団を握って痛みをごまかす。

「おやすみ」

「……おやすみなさい」

これまでだったら、腕の中でした挨拶。額にキスをしてもらって、頭を撫でてもらって、須坂に抱きしめられながら目を閉じていた。

（……やっぱり）

須坂は一人で生活したいのだ。

当たり前だろう。だって里実には迷惑をかけることしかできていない。

（部屋に戻ります。部屋に戻ります……）

心の中で、言い方をシミュレーションする。

「……あの人のところに行きたいか」

「え——」

隣を見る。須坂は天井を向いていた。

「里実があっちに行ってる間に連絡が入ってた。里実を引き取りたいって」

「あ……」

須坂が、淡々とした声で続ける。

「里実が望むなら、いろいろ準備をしないといけない」

（僕は——）

このまま須坂と一緒にいたい。けれどそれを望めば須坂の迷惑になる。抱きしめてもらえないことも、キスをしてもらえないことも、風呂が別だったことも、腕枕をしてもらえないことも、今の話し方のトーンも、すべて須坂の素直な気持ちを表している。

だから須坂を優先しないといけないのに、口を開いたら自分の感情を抑えきれぬ自信がなかった。

「あつちはいつでもいいそうさ。出張から戻り次第すぐにでも」

（あ……）

「普通ならそんなすぐってわけにはいかないんだけど、今回は特例でかまわないって校長も言ってる」

特例――。

（……すぐにでも出て行ってほしいから……だ）

しかも校長まで認めたということは、学校として里実を早く外に追い出したいのだ。

（僕は、ハズレだから……）

別に、今に始まったことではない。

家でも、学校でもそうだったのだ。いてほしくない存在。邪魔で、消えてほしくてたまらない存在。

（ごめんなさい……）

大好きな人に、優しくしてくれた人たちに嫌な思いをさせてしまった。

（戻ってこない方がよかったんだ……）

それなのにこのこと戻ってきてしまった。

（……もしかして）

小島の出張も嘘だったのかもしれない。里実の存在が鬱陶しくなって、けれど追い出すこともできずに出張ということにして寮に戻した。けれど学校も小島が里実を帰すとは思わず、慌てて須坂にこの話を――。

（子どもの頃と、同じ……）

里実が邪魔で、みんな理由をつけて里実を押し付けあった。

（……大丈夫、慣れてる……）

前に戻っただけ。

ここでも同じだった。それだけだ。

（同じ……同じ……）

何度も自分に言い聞かす。

（全部、僕が悪いから……）

馬鹿で、どんくさくて、迷惑をかけてばかりだから。

（……もう、やだ……）

大切な人たちに、これ以上嫌な思いはさせたくなかった。

「……あの、僕部屋に戻ります」

「里実？」

「シャワー、ありがとうございます。お水も」

ベッドから抜けて、パジャマのまま寝室を出る。

「里実――」

玄関で靴を履き、荷物を持って振り返る。

「パジャマは洗って返します。……おやすみなさい」

今までありがとうございます。

心の中で言い、きちんと頭を下げてから部屋を出る。

廊下には誰もいなかった。

しんと静まり返った空間。緑色の非常口の明かりが不気味に光る。

少し歩いてから振り返るが、須坂の部屋のドアが動くことはなかった。

(……大丈夫、いつもどおり)

居場所がないことも、行くあてがないことも。いなくなっ  
てほしいと思われることも。

じんと胸が熱を持ち、次第に心の中が空っぽになっ  
ていく。

階段を上がり、四階を越える。

初めて来た、屋上につながるドア。

ドアノブに手を伸ばす。

どうせ鍵がかかっているだろうと思っていたのに、  
まるで里実を待っていたかのようにドアが開いた。

外に出て、まず目に入ったのは高い塀だった。柵とい  
うより塀とか壁とか、そういう言葉が似合うような頑  
強な遮断物。

(ここも授業で使ったりするのかな)

だから周りから見えないようになっていたのかわし  
れない。

屋上の真ん中辺りまで進むと、里実は上を見た。満天  
の星。

わずかながら感動を覚え、それから塀に近づき、カバ  
ンを下ろしてから上に向かって両手を伸ばす。

(全然届かない……)

おそらく三メートル近くある。

いわゆるブロック塀にあるような、反対側を覗き込  
めるデザインの箇所もない。一周ぐるりと屋上を回っ  
てみるが、手をかけるところも足をかけるところも見  
当たらなかった。

(徹底してる……)

たしかに野外で複数の男性たちがセックスをしていて、  
そこを人に見られるのはまずいだろう。

そんなことを思いながら、もう一度塀に向かって両  
手を伸ばしてジャンプする。

「っ……」

届かなかった。それに顔をぶつけて顎を擦った。

「里実には無理だぞ」

「え——」

反射的に振り返る。

腕を組んだ須坂がドアに寄りかかっていた。

いったいいつから見ていたのだろう。

怖いほどの真顔で、里実に向かってゆっくりと歩いてくる。

「あ……」

「登りたいのか」

「……いえ、そういうわけじゃ……」

じゃあ何をしていた、と問われたら答えられないな  
と思いつつ、さぼさぼと言う。

正面に立った須坂が、じっと里実を見下ろした。

気まずくて顔をそらす。

「ほら」

「え」

須坂が里実に背を向けてしゃがんだ。

「肩車」

「え、え——？」

「いいから、ほら」

須坂は、里実が何をしようとしていたのかわかっていたはずなのに。

（そういうこと、か……）

きつと里実の希望を叶えようとしてくれているのだろう。

「……ありがとうございます」

須坂を汚してしまいそうで、靴を脱いだから首を足で挟んだ。

須坂はゆっくりと立ち上がった。

「届くか」

「ギリギリっ……もうちょっとですっ……」

背筋と両腕を精一杯伸ばすと、ほんの少し指先が堀の先端に触れた。

「ほら」

須坂が、里実の足裏を両手で持ち上げる。

「あっ」

届いた。そのままぐつと下から押され、堀によじ登る。ブロック堀ほどの厚さかと思ったのに、そこはじゅうぶん座れるほどの厚みがあった。ゆつたりとしていてベンチとそう変わらない。

しかしそこに座ると、足が暗闇に吸い込まれるような怖さがあった。けれど顔を上げれば、この辺りはほとんど民家がなく木々ばかりだけれど、遠くには明かりが見えた。

ふと振り返ると、須坂は階段につながるドアに向



かつて歩いていた。世話は終わった、ということだろう。  
お別れも言っていない。でもここから大声で言うのは  
はどうだろうか。失礼かもしれない。

そんなことを思いながら体の向きを直す。遠くを見  
つめていると、タタタツと走る音が近づいてきた。

「え？ーうわっ」

タンツと軽い音がしたと思ったら、隣に須坂が座っ  
ていた。

「……先生」

「ん？」

思わず、振り返って下を見る。

「……高い」

「低かったら危ないだろ」

「……どうやって？」

「助走をつけて、堀に片足について跳躍して」

「……忍者ですか」

「一般人」

「すごい……」

運動神経がいいとそんなことができるのか。

驚きすぎて、別れの挨拶をしなきゃとか、これまでの  
ことを謝らなきゃとか、そんなことはすべて頭から飛  
んでいた。

「里実」

須坂が里実の肩を抱いた。引き寄せられ、胸に頭を預  
ける形になる。

しっとりした、落ち着いた声が耳に届いた。

「もう全部、やめちゃいたいのか」

どう答えるべきかわからなかった。

「……僕はハズレだから」

「ハズレじゃない」

「みんなに迷惑をかけることしかできないから」

「迷惑だと思ってる奴なんか一人もない」

「生まれてこない方がよかった」

「俺は里実と会えてよかった」

「先生……」

「小島さんのところ、行きたいんだろ」

「え——」

「連絡、してやるよ」

「え……いえ」

「行きたいんじゃないのか」

「……行きたくないです」

もう、これ以上迷惑をかけたたくない。

「ひどいことされたのか」

「いえ、優しくしてもらいました」

だからこそ、行きたくない。

「そうか。じゃあ部屋戻るぞ」

「部屋？」

「俺の。当たり前だろ」

「……いえ」

戻らない。須坂にも迷惑をかけたたくない。

ぼうつとした頭で遠くの光を見る。

須坂も何も言わなかった。

夜の風が髪を揺らす。

寒かった。けれど須坂の体温が温かくて、それがまた申し訳なくて、悲しかった。

「先生、戻ってください」

「飛び降りてみるか」

まったく噛み合わない返答に、思わずそちらを見る。

「でも一人では行かせない。俺も一緒だ」

ふわ、と須坂が優しく笑う。

「せん――」

顎を持ち上げられ、キスをされた。

「好きだよ」

驚いている間に、里実の肩を抱いていた須坂の腕が腰に回った。痛いほどきつく抱き寄せられたと思ったら頭も抱き込まれ、体がふわりと宙に浮く。

（――！！）

須坂の上に重なって落下を感じている間、里実の胸に生まれたのはただ後悔だけだった。

須坂を巻き込んでしまった。

（ごめんなさい……）

10万5千字です！

シリーズ完結はまだですが、ハピエンです！

どうぞよろしくお願いいたします。

セクシャルスクール3―サンプル―

©gooneone (ごーわんわん)

2025/ 1/ 31

メール:gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter:@gooneone11

商業情報は『リットリンク gooneone』で検索ください。

本書の無断複写・転載・複製を禁じます。

※この作品はフィクションです。

実在する人物、団体等とは一切関係ありません。